

室戸ジオパークをもとに地域の観光資源の創出と活性化策を探る

1140493 山村 萌

高知工科大学マネジメント学部

1. 概要

日本では、近年急激に都市部と地方の経済格差が広がっている。そのため、国も地域再生法など、地域活性化に向けて地方自治体や企業、住民らによる様々な取り組みに支援を行っている。その結果、地域独自の文化や特産品を活かし、地域ビジネスが成功した事例も増えているが、大半の地域が活性化に成功していない。そこで、本研究では、高知県の東部に位置する室戸市を事例に挙げ、地域の特徴を生かした観光資源はどのようなものなのかを改めて考え直し、地域の活性化に向けて必要な取り組みを考えた。地域が活性化するためには、室戸市を訪れた人に室戸市でお金を消費してもらう工夫が必要である。そこで、近年、日本各地で認定に向けた取り組みが数多く行われ注目を浴びているジオパークを、室戸市が取り入れることにより、室戸市の自然や文化を活かし保全に努めることで観光資源を創出し、経済の発展に繋げようと考えた。

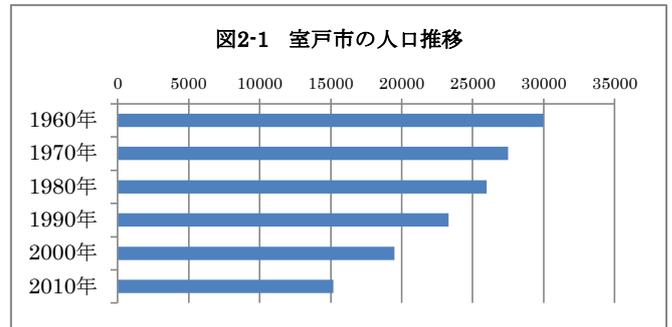
2. 背景

高知県室戸市は 1959 年にできた比較的新しい市であるにも関わらず、人口減少（人口流出）、少子高齢化、経済や産業の衰退が深刻な問題となっている。

室戸市は高知県の東部に位置し、昭和の大合併時に 5 つの町村（安芸郡室戸町、室戸岬町、吉良川町、佐喜浜町、羽根村）から 1 つの市へと合併した。しかし、元々は文化が異なる 5 つの町であったため、地域間の対立が強く残っている。

合併時（1959 年）には 3 万人を超えていた人口も、市外や県外への若者の流出に伴う少子化、高齢化により、今（2013 年 12 月 31 日現在）では半数の 1 万 5000 人に減少した（図 2-1）。このままのペースで減少が続くと、50 年後には室戸市が消滅する。原因として、産業の衰退により仕事（雇用）が少なくなっていること、さらに高齢化も進み、仕事をせずに自給自足のような生活をしている人もたくさんいることが考えられる。

室戸市に雇用を生み出すため、室戸市全体が 1 つになり産業を盛り上げる効果的な対策が早急に待たれている。



（総務省統計局 国勢調査の数値をもとに筆者作成）

3. 目的

本研究では、まず、室戸ジオパークの現在に至るこれまでの経緯と現状、課題の把握を行う。そして、観光資源を創出していく中での問題点や課題を見つけ出す。これらの結果、地域の持続的発展に向けた解決策を提案する。

4. 研究方法

本研究では、はじめに、ジオパークに関する書籍や公表資料などにより、ジオパークがどのようなものなのかを整理する。その上で、実際に室戸ジオパーク推進協議会でのインタビューを行い、室戸ジオパークの現在に至るこれまでの経緯、現状、今後の課題までを把握する。同時に、室戸市を訪れている観光客や研究者、室戸市民や室戸市の企業や行政などにヒアリング調査を行い、室戸市やジオパークに対する関心や意識について調査した。そして、これらと同時並行して、2012年11月3日～5日開催の、第3回ジオパーク全国大会（室戸大会）と同日にジオパークに関連するイベントを企画・実施する。次に、他のジオパークとの比較を行い、室戸市がジオパークの世界認定に向けて取り組んできた中でのメリット、デメリットを整理する。最後に、室戸市が今後観光客や観光収入の増加に向けて、どのような取り組みをしていけば良いのかを検討する。

5. 結果

5.1 ジオパークとは

5.1.1 ジオパークの概要

世界ジオパークネットワーク（GGN）によると、ジオパークは以下のように定められている。

- ① 地域の地史や地質現象がよくわかる地質遺産を多数含むだけでなく、考古学的・生態学的もしくは文化的な価値のあるサイトも含む、明瞭に境界を定められた地域である。
- ② 公的機関・地域社会ならびに民間団体によるしっかりした運営組織と運営・財政計画を持つ。
- ③ ジオツーリズムなどを通じて、地域の持続可能な社会・経済発展を育成する。
- ④ 博物館、自然観察路、ガイド付きツアーなどにより、地球科学や環境問題に関する教育・普及活動を行う。
- ⑤ それぞれの地域の伝統と法に基づき地質遺産を確実に保護する。
- ⑥ 世界的ネットワークの一員として、相互に情報交換を行い、会議に参加し、ネットワークを積極的に活性化させる。

また、日本ジオパークネットワーク（JGN）によると、ジオパークとは、ジオ（地球）に親しみ、ジオを学ぶ旅、ジオツーリズムを楽しむ場所と定義されている。ジオ（地球）に親しむというのは、自然と人間と文化の関わりについて考えることではないかと考える。関わり方は様々で、ガイドさんと一緒にジオパークを散策すること、学校の授業で使用すること、関連商品を販売することなどが挙げられる。

日本におけるジオパークの体制は、ユネスコの支援する世界ジオパークネットワーク（GGN）が世界のジオパーク活動を推進し、日本では GGN 公認の日本ジオパークネットワーク（JGN）が日本におけるジオパーク活動を推進している。日本ジオパーク委員会（JGC）は、日本から GGN への推薦と日本ジオパーク認定を行う委員会（事務局：産業技術総合研究所）で、JGN と協力して日本におけるジオパーク活動を推進している（図 5-1）。

ジオパークを名乗るには書類審査と現地審査が必要である。世界認定を受けるためには、日本ジオパークネットワークの準会員からスタートし、日本ジオパークネットワークへの加盟、世界ジオパークネットワークへ加盟のための審査、世界ジオパークネットワークの審査を経て、合格となれば、ようやく世界ジオパークネットワークに加盟し、認定を受けることが出来る（図 5-2）。

2014年2月現在、世界ジオパークに認定されている地域は、日本の洞爺湖有珠山、糸魚川、島原半島、山陰海岸、室戸、

隠岐の6地域を含め、29カ国100地域にもなる。特にヨーロッパと中国には多く存在する。日本ジオパークは、アポイ岳、南アルプス、恐竜渓谷ふくい勝山、阿蘇、天草御所浦、白滝、伊豆大島、霧島、男鹿半島・大潟、磐梯山、茨城県北、下仁田、秩父、白山手取川、八峰白神、ゆざわ、銚子、箱根、伊豆半島、佐渡、四国西予、おおいた姫島、おおいた豊後大野、桜島・錦江、三笠、三陸、とちか鹿追の27地域が認定されている。また、日本ジオパークを目指す地域（準会員）も16地域ある。

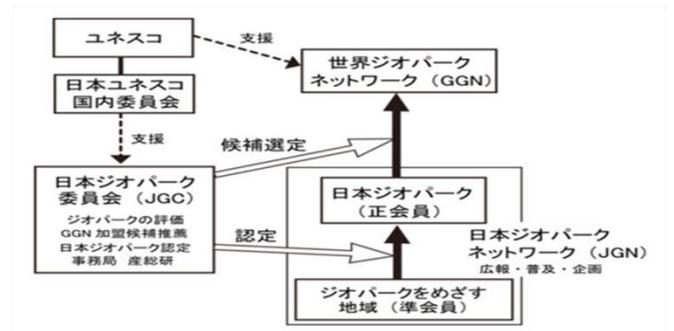


図 5-1 日本におけるジオパークの体制

引用：地質調査総合センターHP

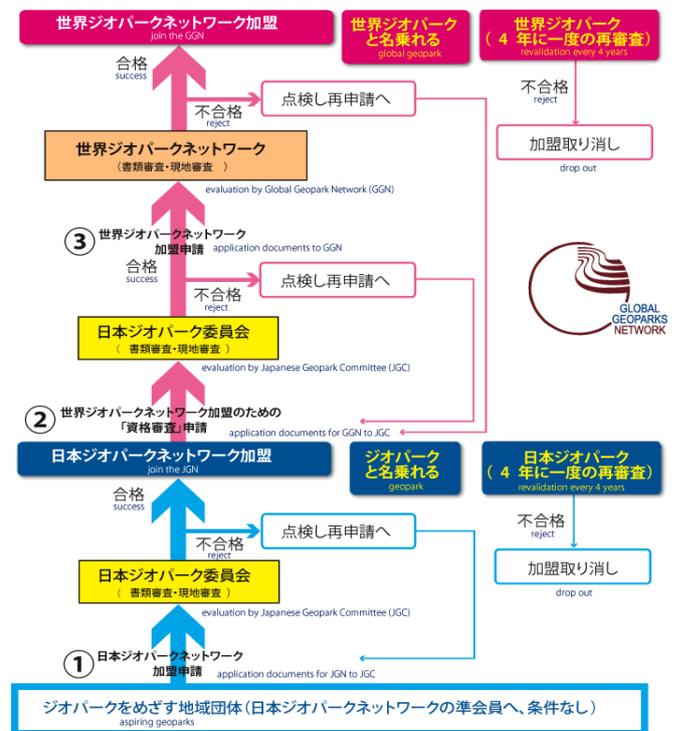


図 5-2 ジオパークの加盟・認定の順序

引用：日本ジオパークネットワークHP

5.1.2 ジオパークのこれまでの経緯

1992年 国連環境開発会議でジオパーク構想（※）が採択（リオデジャネイロ）

2001年 ユネスコが活動開始

2004年 世界ジオパークネットワーク (GGN) 結成

2004年4月 第1回GGN国際会議(中国 雲台山ジオパーク)

2008年5月 日本ジオパーク委員会 (JGC) 設立

2009年 日本ジオパークネットワーク (JGN) 結成

2013年9月現在 29カ国100地域に世界ジオパークが存在
※ジオパーク構想とは、地質遺産や地質学的な多様性を保護・保全すること。

5.1.3 世界遺産との違い

「ジオパークは貴重な地質遺産である＝世界遺産と同じなのではないか」と思われがちである。だが、世界遺産とジオパークには大きな違いがある。世界遺産は、評価対象が世界でここだけの価値の“モノ”なのに対し、ジオパークは優れた大地の遺産である“モノ”に加え、優れた活動を行う“ヒト”も含まれる。そして目的は、世界遺産が遺産を“保護”することにあるのに対し、ジオパークは遺産の“保護”に加え、教育や地域振興などに“活用”することも含まれる。また、審査方法も異なる。世界遺産は一度審査に通ると世界遺産として呼ばれ続けるのに対し、ジオパークは世界認定を受けても、4年ごとに再審査が行われる。そのため、持続的な活動が求められている。

世界におけるジオパークの数は、世界遺産の数と比較すると5分の1程度にとどまっているが、1年間の増加数は世界遺産よりもはるかに多く、急激に世界に広まっている。

5.1.4 室戸ジオパークとは

室戸ジオパークは、高知県東部の室戸半島に位置しており、面積248.30㎏の室戸市全域を範囲としている(図5-3)。2008年6月に室戸ジオパーク推進協議会を設立し、ジオパーク活動への取り組みを開始した。世界認定の前提である日本ジオパークネットワークには、同年12月8日に認定された。そして、2011年9月18日に、二度目の挑戦で世界ジオパークに認定され、室戸市の自然、文化、歴史、産業、人が世界的な評価を受けることができた。“まるごと さんかく ジオパーク”というキャッチフレーズを掲げ、大地が盛り上がり続ける場所で、人々がどのように賢く暮らしてきたのかをテーマとして設定している。“まるごと”は室戸市全体がジオパークであることを意味しており、“さんかく”は室戸市の形を示している。「室戸ジオパーク＝室戸岬」というイメージの先行を

払拭するために適したスローガンであると言える。

室戸ジオパークには、室戸岬、吉良川の町並み、鯨文化、海洋深層水、遍路道など、大小22のジオサイトがあり、観光、観察、体験をすることが出来る(図5-4)。ジオサイトというのは、ジオパーク内の見どころ(観光スポット)のことを指し、各地のジオパークでは個性豊かなジオサイトが設定されている。また、各ジオサイトには、そこでのポイントや見どころ、歴史を知ることの出来るテーマも掲げられている。

室戸ジオパークでは、世界で最も詳しい研究がなされ、地震隆起などによって形成された海成段丘、巨大地震によって離水した海岸地形、日本三大崩壊地の一つである「加奈木崩れ」などの地質遺産を見ることができ、大地形成のダイナミズムを実感できる。また、国の天然記念物に指定されている亜熱帯性植物と海岸植物群落も国道からすぐに見えることも魅力の1つである。南海トラフに沿って発生する巨大地震の痕跡など世界的にも貴重な地質資源を有しており、貴重な地質資源の価値を高め、他の観光資源等と併せて交流人口の増加や地域の活性化を図っている。

これまで、ジオパークの世界認定を目指し、案内看板、説明板、誘導板の設置をはじめ、ジオパークガイド養成、広報媒体(ホームページ、DVD等)の作成、代表的な見どころポイントへの遊歩道の整備、駐車場の整備、市民説明会や講演会、ジオパークマスター講座の開催などを行ってきた。世界認定を受けてからは、室戸市を訪れる観光客も増加傾向にあるが、室戸市での宿泊や食事をする人は伸び悩んでおり、室戸市でお金を消費してもらうには、まだまだ対策が必要であり、今後の課題であるといえる。また、来年(2015年)には再認定に向けた審査も控えているため、継続的な活動も怠ってはならない。



図5-3 室戸ジオパークの場所

引用：日本ジオパークネットワークHP



図 5-4 室戸ジオパークのジオサイト

引用：室戸ジオパークHP

5. 2 市民のジオパークに対する意識の差

2012年9月10日から18日までの9日間、室戸ジオパークの活動母体である、室戸ジオパーク推進協議会でインターンシップを行った。室戸ジオパーク推進協議会は、室戸市役所の室戸ジオパーク推進課に併設されており、推進課と推進協議会の差は非常に曖昧である。世界ジオパークネットワークのガイドラインに沿いながら、調査研究・情報収集・環境整備・情報発信を行う任意団体であり、市民のみならず国民のジオパークへの関心を高め、持続可能な地域社会を形成することを目的としている。会長は小松室戸市長であり、室戸市や高知県、室戸市商工会、室戸市観光協会、旅行会社、高知大学、教授、研究者等、約40団体より構成されている。

インターンシップ期間中、室戸市で生活、活動している様々な方からお話を聞くことができた。まず、室戸ジオパークの観光の拠点ともいえる、ビジターセンター（道の駅キラメッセ室戸内）とインフォメーションセンター（室戸岬）の方は、室戸ジオパークについての知識も豊富で、お客さんからの質問に対しても答えることができる。また、ビジターセンターやインフォメーションセンターを訪れた方が楽しむことができるように、クイズを作るなど、様々な工夫を行っている。

室戸市を訪れていた研究者は、室戸の貴重な地質遺産は道路から近いところで観察、調査、研究できるため、よく訪れるようだ。研究者の中では、室戸の地質遺産は世界的にも有名であり、ジオパークとして知られる前から知名度は高い。阿蘇ジオパークなど、もともと観光地として有名どころではなく、室戸のように観光客を増やそうとしている地域がジオパークとして認定されることが効果的であると考えている。

ガイド養成講座の参加者は、室戸ジオパークについて学び

たい人、ガイドとして活動したい人、既にガイドさんとして活動している人など、数十名が室戸市内をはじめ、室戸市外からも参加していた。年齢層は高く、高齢の方がほとんどだったが、中には20～30代の人もいた。ガイド養成講座に参加している人は、受講後ガイドで生計を立てるのではなく、趣味として受講、活動予定の人がほとんどであった。室戸ジオパークには、室戸市観光協会主体の室戸市観光ガイドの会をはじめ、佐喜浜の源木を育てる会やNPO法人室戸を元気にする会、NPO法人吉良川町並み保存会などでもガイドを行っている。金額や内容、ガイド行う地域も各団体により異なる。ガイドの数は、認定直後よりも伸びていて、室戸市民の関心も高まってきていると言える。

しかし、一般の市民には、ジオパークが室戸岬の岩だというイメージが定着している。ジオパークに関する講演会や勉強会、ローカル番組などでの放送を行っているが、関心を持っていない人も多く、室戸市の課題である。

5. 3 広告宣伝力不足

室戸ジオパーク推進協議会でのインターンシップの期間中、2012年11月3日から5日に第3回日本ジオパーク全国大会（室戸大会）が開催されることを知った。そこで、全国大会期間中の11月3日に鯨館、キラメッセ室戸、室戸ジオパーク推進協議会の柚洞一央氏、桂研究室のゼミ生に協力を仰ぎ、鯨館主催で全国大会参加者や観光客向けのイベントを企画、開催した。

イベント名は「室戸で遊ぼう クイズ de ポン」。室戸ジオパークに関するクイズラリーや貝殻アクセサリ作りを行った。日本ジオパーク全国大会のHPにも広告を掲載させていただき、当初は100人程度の参加者を予想していた。全国大会の開催は高知新聞などでも特集されていたため、多くの観光客が訪れると思っていた。実際、全国大会には全国より約2,200人が室戸を訪れたが、全国大会のプログラムに参加する人がほとんどで、イベント開催場所にはいつもと同じぐらいの観光客数だった。一般の観光客も、全国大会の開催を知っていた人は少なく、広告宣伝力にまだまだ課題が残る。

5. 4 県外観光客動態調査より

2012年8月26日には、高知県観光振興部観光政策課が株式会社クリケットに委託して調査を行っている、県外観光客動態調査に同行させていただいた。委託先である株式会社クリケットにおいて、2012年8月16日から8月31日にインタ

ーンシップを行っていた。県外観光客動態調査の調査場所は室戸岬の室戸ジオパークインフォメーションセンター付近と室戸市観光協会付近で、調査対象者は100名である。

日帰り客・宿泊客の割合は、宿泊客の割合が6割を超えていて、日帰り客よりも多い(図5-5)。しかし、室戸市外のホテルや知人・友人宅に宿泊する人が多いため、室戸市内でのお金の消費に繋がっていない。

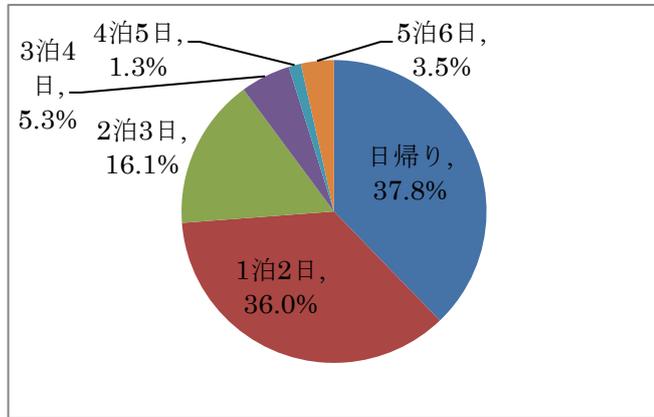


図5-5 日帰り客・宿泊客の割合

(平成24年県外観光客入込・動態調査報告書の数値をもとに筆者作成)

発地ブロック別入込割合は、四国内が最も多く、次いで、近畿、関東、中国と続いている(図5-6)。四国、近畿、中国の各ブロックからは、自家用車や観光バスで訪れることが可能であるため、数値が高くなる。また、関東からは、高知羽田間の飛行機があるため、高知市からレンタカーを借りて観光をしている人が多い。

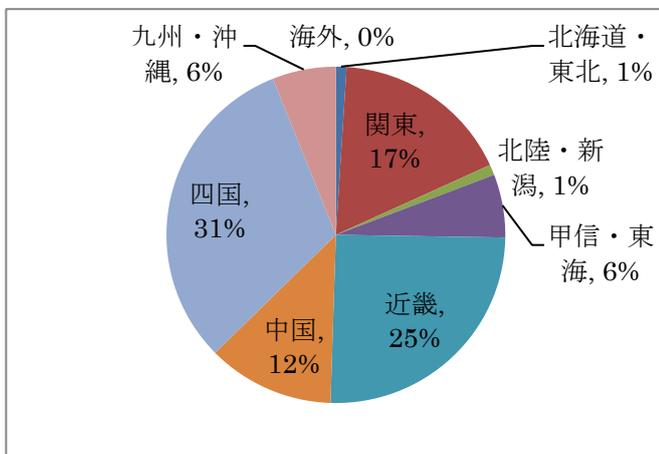


図5-6 発地ブロック別入込割合

(平成24年県外観光客入込・動態調査報告書の数値をもとに筆者作成)

旅行目的の割合は、自然見物、名所旧跡が多い(図5-7)。

調査地が室戸岬ということもあるが、室戸には霊場が3か所もあるという利点を活かしていない。今年(2014年)は、四国霊場開創1200年とも重なっているため、これをきっかけに、神仏・霊場巡りの割合が高くなるような努力が必要である。また、新鮮な海の幸・山の幸がたくさんあるにも関わらず、食べ物を目的として訪れている人は少ない。最近は、「キンメ井」や「季節の御膳」を室戸市内の飲食店で提供しており、今後の集客を見込んでいる。

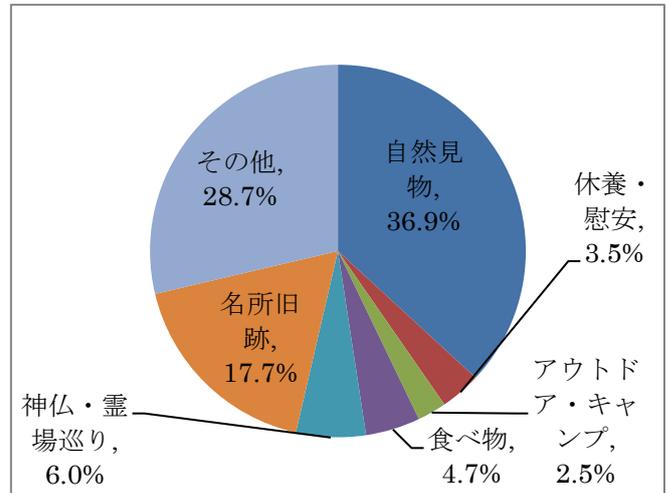


図5-7 旅行目的割合

(平成24年県外観光客入込・動態調査報告書の数値をもとに筆者作成)

旅行形態の割合は家族が6割を超えている。団体はこの時の調査では0%となっているが、実際は、ジオパーク認定後は観光バスで訪れる観光客が増加傾向にある。しかし、観光バスでは室戸ジオパークは室戸岬しか立ち寄らないことも多く、お金の消費に繋がっているとは言えない。

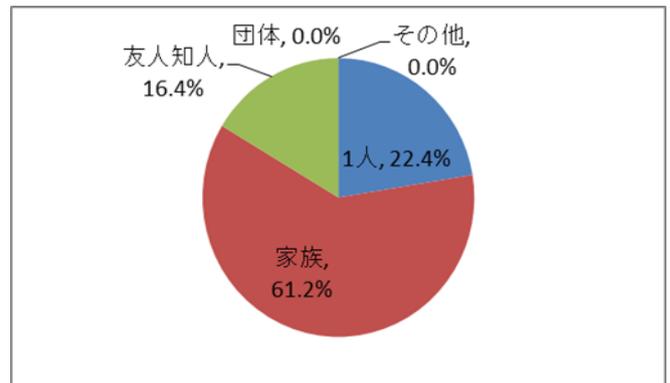


図5-8 旅行形態割合

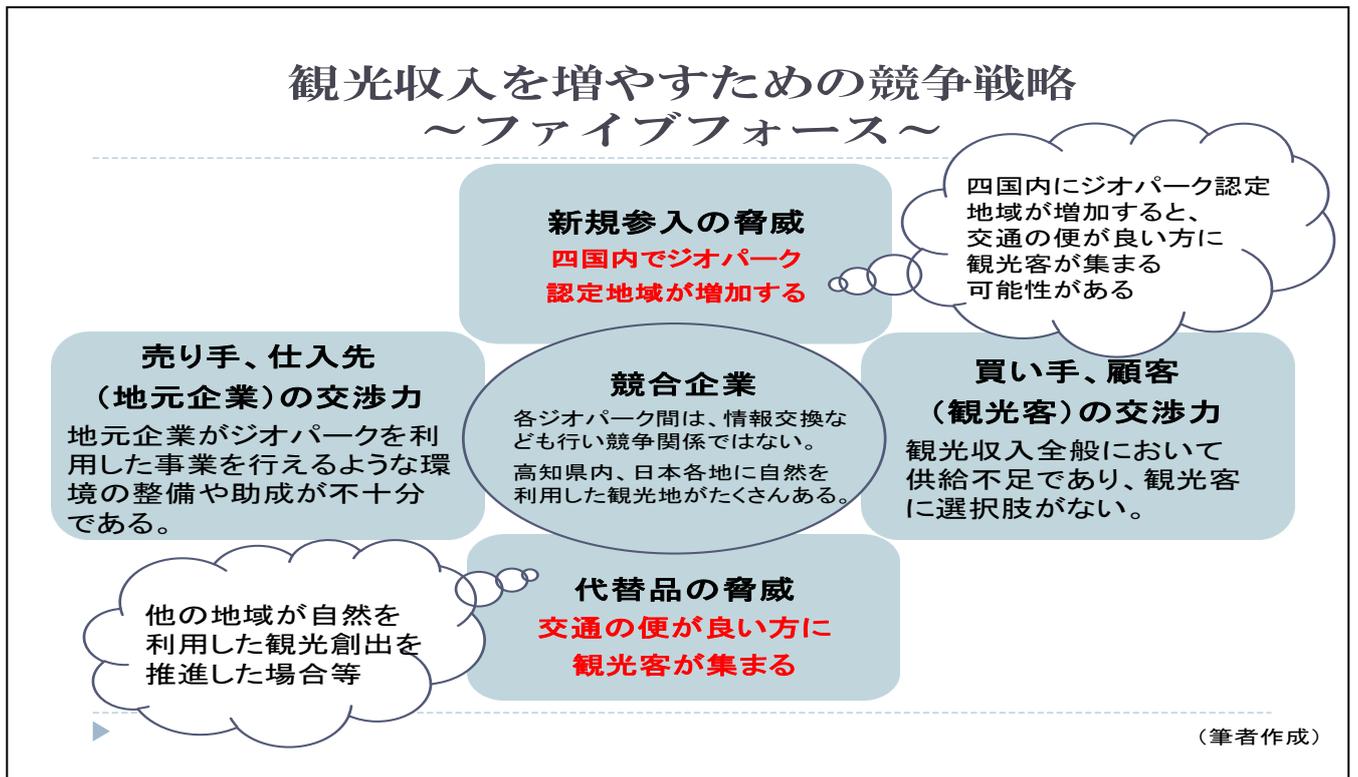
(平成24年県外観光客入込・動態調査報告書の数値をもとに筆者作成)

5. 5 分析

5. 5. 1 3C分析

市場・顧客動向	ライバル企業・業界動向	自社の動向
<p>[既存の顧客層]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全地域、全年齢、男女問わず ・地質学者 ・自然や歴史に関心のある人 ・自然の中で休暇を過ごしたい人 <p>[購買行動・ニーズ・ターゲット]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域活性化のニーズ ・観光資源としての利用 ・教育や研究への利用 ・自然体験 ・地球科学の普及への利用 <p>[市場規模・成長性]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・差別化による成長の可能性あり ・地域の企業や市民に、ジオパークを利用した雇用創出や事業創出を推進することにより、地域活性化を行う 	<p>[競合他者の状況]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世界認定を受けている地域は国内に6ヶ所のみである ・世界認定、日本認定を目指している地域は増えている ・ジオパークは地方に多く点在しているため、どの地域も交通の便が悪い ・自然を利用した観光名所は、ジオパークに限らずたくさんある <p>[観光業界の動向]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自然体験ツアーの需要や供給が増加している ・高知県は各地域で自然を利用した観光を売り出している 	<p>[生産力、販売力]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お土産物が少ない ・周辺の既存企業の広告・宣伝力がなく、飲食店や宿泊場所が観光客に知られていない ・関連施設の維持費の確保が課題である ・関連施設の入場料や関連サービスが安価、無料である <p>[リーダーシップ・組織]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・室戸ジオパーク推進協議会は、市長を中心に40団体で構成 ・職員は室戸市役所ジオパーク推進課とともに活動している ・各観光スポットごとに、様々な団体が活動しているが、協力体制が整っていない ・高知県東部地域の協力体制が不十分 <p style="text-align: right;">(筆者作成)</p>

5. 5. 2 観光収入を増やすための競争戦略



<p>5. 5. 3 SWOT分析</p>	<p><u>強み</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・自然愛好者が増加傾向 ・室戸ジオパークの世界認定 ・地質学者などの興味、関心が強い 	<p><u>弱み</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・交通の便が悪い ・観光地としての収入不足 ・地域ごとの意識の差 ・室戸岬の岩だけがジオパークと思われている
<p><u>機会：ビジネスチャンス</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「高知家の食卓を楽しもう」 ・高知県東部博覧会 ・四国霊場開創 1200 年 ・室戸阿南海岸国定公園 50 周年 	<p><u>SO 戦略</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・四国で唯一の世界ジオパーク ・学者の長期滞在の見込みがある ・イベントとの関連による観光客の増加が見込める 	<p><u>WO 戦略</u></p> <p>ジオパークの世界認定により注目を浴び、室戸市を訪れる人は増加傾向にあるが、自家用車やツアーバスで訪れる人が多いため、短時間の滞在が多く、経済効果は低い。</p>
<p><u>脅威</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・自然災害の被害 ・日々の天候に左右される ・4年ごとに再審査がある ・有名観光地もジオパークに認定されている 	<p><u>S T 戦略</u></p> <p>家族旅行などで自然と触れ合えることが出来る場所や体験ができる場所を考える人が増えているが、天候や自然災害に左右されることが多い。</p>	<p><u>WT 戦略</u></p> <p>ジオパークのイメージとして「珍しい地形」が先行しているため、室戸岬にのみ立ち寄る人が多い。また、日々の天候により滞在時間や訪れる人数も大きく左右される。</p> <p style="text-align: right;">(筆者作成)</p>

5. 6 他のジオパークとの比較

室戸ジオパークとの比較として、洞爺湖・有珠山ジオパークを例に挙げる。北海道の洞爺湖・有珠山ジオパークは、北海道の南西部に位置しており、洞爺湖や有珠山のほか洞爺湖温泉もあることから道内屈指の観光地として有名である。洞爺湖・有珠山ジオパークは、日本国内では早くよりジオパーク構想を行っており、2009年8月22日に新潟の糸魚川ジオパーク、長崎県の島原半島ジオパークと共に日本で初めて世界認定を受けたジオパークである。2013年7月には再認定に向けた審査を受け、同年9月9日に再認定された。この地域では、これまでに幾度となく火山活動がおこり、居住地や観光施設などが被害を受けてきた。病院、学校などの移転や砂防施設の整備を繰り返し、火山と共生するまちづくりを行っている。多くの人が住む地域が、活動の盛んな火山にこれほど近接している場所は世界でも稀であり、変動する大地とそこでの人々の生活を見て学び体験できる、「変動する大地との共生」をテーマとしたジオパークである。

室戸ジオパークは交通の不便さや立地の悪さ、宿泊場所や飲食店の少なさが、観光地として成功していない原因であるとよく言われる。今回、洞爺湖・有珠山ジオパークを比較対象とした理由は、主要都市からのアクセスにおいて酷似する

部分があったため、交通アクセスが観光客の入込み数に關係しているのか、また、室戸ジオパークの宿泊場所や飲食店が本当に少ないのかも検証した。

まず、室戸ジオパークは、車や公共交通機関を利用し、高知市から約2時間、徳島市から約3時間という立地にある。一方の洞爺湖・有珠山ジオパークも、札幌市から約2時間、函館市から約3時間という立地にある。室戸の観光客数のピークは1991年で、56万人を超えていたが、その後は急激な減少に転じていた。しかし、ジオパーク認定後は増加傾向にあり、ジオパークの認定は効果的であったと言える。一方、洞爺湖・有珠山は、火山の噴火などの自然災害の影響を受け、減少傾向にある。ジオパークの認定により観光客の増加を期待しているが、効果が表れていない(図5-9)。この結果より、ジオパーク認定の効果は大きく異なるが、洞爺湖・有珠山は交通のアクセスが悪いにも関わらず、毎年200~300万人の観光客が訪れているため、室戸の観光客数が少ないのは交通の便の悪さだけが原因なのではないと考えられる。

次に、宿泊施設と飲食店の数を比較した。比較は、観光協会のHPで行った。宿泊施設は室戸が22か所、洞爺湖・有珠山が15か所であった。洞爺湖は温泉地としても有名であるが、観光協会のHPでは室戸の方が多い。このことから、室戸に

宿泊場所が少ないというのは、宣伝力がなく認知度が少ないだけではないかと考えられる。一方、飲食店は、室戸が15か所、洞爺湖・有珠山が29か所で、洞爺湖・有珠山は室戸の2倍掲載されていた。室戸は、食べ物のおいしさが売りの一つであるにも関わらず、宣伝しきれていない。

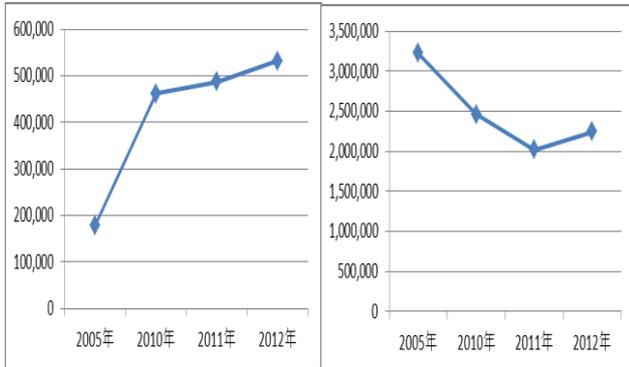


図 5-9 室戸の観光客数の推移(左)洞爺湖・有珠山の観光客数の推移(右)
(室戸市 HP、社団法人洞爺湖温泉観光協会 HP をもとに筆者作成)

6. 対策と提案

5章で分析した結果をもとに、地域経済の持続的な発展に必要な、観光客に室戸市内でお金を消費してもらう方策について検討した。

無料の施設やサービスの有料化

5.4 や 5.5 で示されたとおり、お金を使わずに観光できたり、室戸ジオパーク関連施設が入場無料では、観光資源として不十分である。実際に、室戸ジオパーク内のドルフィンセンターでは、イルカとの触れ合いを有料で行っているが、夏休みともなると、多くの親子連れで賑わっている。しかし、室戸ジオパークビジターセンターや土佐備長炭資料館ほのぼの館、室戸海洋深層水アクアファームなどは無料開放されている。中国のジオパークなどでは、自然を見るためにも入場料がかかっているが観光客は訪れているため、施設の入場料の有料化は可能であると考えられる。

「キンメ井」「季節の御膳」の宣伝

アンケート調査の結果、室戸を訪れる前後に食事をしてきている人が多いことが分かった。その理由として、食事をとることのできる場所を知らない人が多数を占めた。ここ数年、室戸市内の飲食店が協力し、キンメ井や季節の御膳を提供している。室戸でしか食べることのできないキンメ井や季節の御膳が広まると、それを求めて室戸を訪れる人が増えるのではないかと考える。また、2014年度は「リョーマの休日」キャンペーンで、食資源を売り出す「高知家の食卓を楽しもう」

が行われる。この機会を活かし、食べ物を宣伝することで、室戸に飲食店があることも伝わると考えられる。

7. 今後の課題

室戸市が経済の衰退を食い止めるには、まだまだ多くの工夫が必要である。観光客や研究者など、室戸を訪れる人に長期滞在してもらうこと、ジオサイト（観光スポット）を数多く回ってもらうようモデルコースの提案をすること、宿泊施設やレストランなど、長期滞在に必要な情報の広報に力を入れること、ジオパーク関連施設で入場料をとること、お土産物の販売場所の確保などが考えられる。

そして、近年ジオパークが世界的に注目を浴び始めており、日本国内においても、既に観光地として有名な地域の日本認定、世界認定が増加している。“ジオパーク”というワードの知名度が伸びているため、他地域のジオパーク認定による相乗効果を狙うべきである。また、当初のイメージの払拭（ジオパーク≠室戸岬）も同時に行わなければならない。

また、2015年には世界認定の再審査を控えている。まずは、“世界ジオパーク”に認定されていることが価値の1つであるため、再審査に向けての継続的な取り組みを続ける必要がある。

8. 参考文献、引用文献

- [1] オーム社 “ジオパーク・マネジメント入門” 著者 社団法人全国地質調査業協会連合会／特定非営利活動法人地質情報整備・活用機構（共編）
- [2] ダイアモンド社 “競争戦略論 I” 著者 マイケル・E・ポーター（訳 竹内弘高）
- [3] 室戸市 HP
<http://www.city.muroto.kochi.jp/hopweb/joho/html/>
- [4] 室戸ジオパーク HP <http://www.muroto-geo.jp>
- [5] 一般社団法人室戸市観光協会
<http://www.muroto-kankou.com/>
- [6] 日本ジオパークネットワーク <http://www.geopark.jp/>
- [7] 日本地質学会 HP <http://www.geosociety.jp/>
- [8] 洞爺湖有珠山ジオパーク HP
<http://www.toya-usu-geopark.org/>
- [9] 社団法人洞爺湖温泉観光協会 <http://www.laketoya.com/>
- [10] 独立行政法人 産業技術総合研究所 地質調査総合センター <https://www.gs.j.jp/HomePageJP.html>
- [11] 総務省 HP <http://www.soumu.go.jp/>